

責任者	経済学部長	作成部局	経済学部
-----	-------	------	------

### 2021年度に向けた教育研究目標

#### 【A票:教育研究目標1】

(タイトル)

学部での専門的な学びを実践し、卒業後に社会で活躍していくために必要な基礎学力を修得できる教育を提供する。

(狙い内容)

多くの学生は本学部卒業後は社会へと出て行くので、社会、とくにグローバル化が進む社会で役立つような学びを本学部で提供する。そこで、教務上の1つめの目標として、基礎学力を修得する教育に力を入れる。ここでの基礎学力とは、経済学・数学・統計学などの分析ツールを利用して現実の経済を分析する能力と、英語などの外国語を使って経済やビジネスについて議論できる能力である。これらの能力のうち、今回は外国語に関する教育の充実を目標として掲げる。すなわち、外国語資格・検定試験の成績向上を目指し、また留学生とともに英語を使って経済と経済学を学ぶ科目の提供を増やす。

#### 1. 6年後(2021年度)の目指す姿(目標)

外国からの受け入れ留学生も増加する中、経済学部においても英語で提供する講義科目の割合が高まる。こうした中で、留学生の講義への質的なニーズにも十分こたえ得る内容を提供するとともに、日本人の受講生も内容を十分に理解し、満足のいく成果を得られるような状況を達成する。

#### 2. 上記の目標を設定した背景、課題及び現状分析について、記述してください。

現時点での課題として、教員側の英語による教授スキルとともに、学部生の英語能力が不十分であるため、基礎的な内容しかカバーすることができず、それが留学生に満足のいく水準の講義を提供できない一因となっている。今後6年間で、こうした状況を改善していく。具体的には、①英語能力に優れた教員比率の増大、②教員側の英語による講義スキルの向上、③学生、特に中位層の学生の英語運用能力の向上、等を図っていく。

#### 3. 達成度評価

評価指標	TOEIC (TOEIC-IPを含む)で600点以上のスコアを記録する学生の割合	評価尺度	A: 約20% B: 約16% C: 約12% D: 12%未満
------	--	------	---

#### 4. 年度毎の目標値

2015年度(現状)	2016年度	(2017)年度	(2018)年度	(2019)年度	(2020)年度	2021年度
D	D	C	C	B	B	A

#### 【A票:教育研究目標2】

(タイトル)

基礎学力に基づいて論理的に思考し、その内容を他者に伝える能力を備えてグローバルに活躍できる人材を育成する。

(狙い内容)

多くの学生は本学部卒業後は社会へと出て行くので、社会、とくにグローバル化が進む社会で役立つような学びを本学部で提供する。そこで、教務上の2つめの目標として、基礎学力を使って論理的に思考して他者に伝える能力を涵養するために、論理的に文章を書く能力を育てる横断的なカリキュラム(Writing across curriculum)を提供する。すなわち、授業の中で論理的に考えて文章を書くことを指導をする科目を既存科目の中から指定していき、担当教員相互のFDを通して、このような能力を育む教育を提供する。

#### 1. 6年後(2021年度)の目指す姿(目標)

学部を卒業していく学生が、目的(例えば、論証、提案etc.)に合わせて機能する文章を書く能力を身につけていること。

#### 2. 上記の目標を設定した背景、課題及び現状分析について、記述してください。

定期試験に代わるレポートだけでなく平常時のレポートでも剽窃問題が生じているが、これは単に倫理的な問題として捉えるべきではなく、技術的な問題としても捉えるべきだと思われる。実際、日本の大学入学前までの(特に、義務教育課程の)作文指導は、読書感想文に代表される「生き生きとした感情の表現」を目的とするものに偏っており、大学におけるレポート課題等で想定されているライティングの仕方が分からないという学生が多くを占めている。こうした課題に応えるには、「日本語文章法」といった類いの科目を設置する(→非常勤講師に担当してもらう)のではなく、経済学部の本来の教育のなかで(すなわち、学生たちが興味をもって取り組んでいるコンテンツをベースにして)上記のような能力を身につけさせることは、学部教育・学士教育の本義に沿うものと考えられる。

#### 3. 達成度評価

評価指標	卒業要件となる科目群とは別に、「Writing across Curriculum 科目グループ」なるものを設定し、それに参加する科目を徐々に増やすことを目指す。それに参加する科目は、授業回数とほぼ同じ頻度で文章作成を行う科目(文章作成は、授業内・授業外を問わない)とする。	評価尺度	A: 80(ほとんどの演習科目といくつかの講義科目) B: 40 C: 20(多くの基礎演習) D: 0
------	---	------	---

#### 4. 年度毎の目標値

2015年度(現状)	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
D	C	C	B	B	B	A

**【A票:教育研究目標3】**

(タイトル)

すべての学生が活躍できる学部を目指す。

(狙い内容)

各学生が将来を見据えて学部4年間の目標を立て、その目標に向かって少しでも前進し、その前進がよく自覚できるよう、学生の個性に応じた支援をする。そのために、入試形態別に成績・課外活動・就職のデータを利用して、それぞれの特徴から改善点を探り、教育を中心に支援を提供する。また、そのために学習ポートフォリオを学生が活用する枠組みを構築する。

**1. 6年後(2021年度)の目指す姿(目標)**

成績不振者・勉学意欲喪失者・退学者を現在よりも減少させ、かつすべての学生の大学生生活満足度を現在よりも上昇させる。また、各学生が将来の自分の夢を実現するために、適切に科目履修・資格取得ができるような仕組みを強化する。さらに、社会変化に柔軟に適応する力、いかなる職場においても貢献しうる力を育てるために、課外活動なども含めて学生の全人的成長を見守る。

**2. 上記の目標を設定した背景、課題及び現状分析について、記述してください。**

大学生生活になじめない、あるいは勉学とクラブ活動等との両立に悩む学生は少なくない。また卒業に必要な単位を修得するのみで、具体的な将来ビジョンを描けない学生も多い。あらゆる学生の才能を十分に発揮させるための誘導が必要である。直近10年間(2005-14年)の退学者は年平均36名、留年者は年平均149名である。学部としても、彼らに入学を許可した以上は、その教育に関して一定の責任がある。また外国人留学生の中退率・学生生活満足度は極端に悪い。彼らを支援することは、グローバル化を進める上でも不可欠である。

**3. 達成度評価**

<b>評価指標</b>	退学者数、 留年者数、 学習ポートフォリオ利用率 学生生活満足度	<b>評価尺度</b>	A: 退学者27名、留年者134名 ポートフォリオ利用率90%、学生満足度90% B: 退学者30名、留年者139名 ポートフォリオ利用率60%、学生満足度88.5% C: 退学者33名、留年者144名 ポートフォリオ利用率15%、学生満足度87% D: 退学者36名、留年者149名 ポートフォリオ利用率15%未満、学生満足度85.4%
-------------	---	-------------	--

**4. 年度毎の目標値**

2015年度(現状)	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
D	D	C	C	B	B	A

**【A票:教育研究目標4】**

(タイトル)

対外的な研究成果の発信に努め、教育へのフィードバックを含め、研究成果を社会に還元し寄与していく学部を目指す。

(狙い内容)

教員による研究活動を活性化し、社会へその成果を還元していくために、学術誌、ディスカッションペーパー、セミナー、コンファレンスなどにおける研究発信に加え、学部ホームページなどICTを利用した情報発信を充実させていく。特にグローバル化が進むなかで、英語での情報発信を増やしていく。

**1. 6年後(2021年度)の目指す姿(目標)**

学術誌、ディスカッションペーパー、セミナー、コンファレンスなどにおける研究発信をこれまで以上に積極的に進める。また、セミナー、コンファレンスなどの開催も積極的に行うことで研究交流を促進し、同時に研究成果の発信に努める。具体的には、掲載論文数の増加、掲載学術誌の水準の向上、セミナー、コンファレンスなどの開催の頻度の向上が挙げられる。

**2. 上記の目標を設定した背景、課題及び現状分析について、記述してください。**

教育のグローバル化が進展する一方で、研究活動もグローバル化が進展している。こうした状況において、対外的な研究発信を積極的に行うことが大学にとっては重要であり、本学が対外的な評価を得るためには欠かせない。しかしながら、セミナー、コンファレンスの開催、教員の研究活動の情報発信などにおいて必ずしも活発に行われているとは言い難い。今後これらについて改善する必要がある。

**3. 達成度評価**

<b>評価指標</b>	発信できる研究成果としてのディスカッションペーパー発行数と経済学セミナーの開催回数	<b>評価尺度</b>	A: 行動計画どちらもA B: 行動計画どちらもB C: 行動計画どちらもC D: それ以外
-------------	---	-------------	---

**4. 年度毎の目標値**

2015年度(現状)	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
D	D	C	B	B	A	A

**【A票:教育研究目標5】**

(タイトル)

データに基づき、各種の高大接続方法を検討・改善する。

(狙い内容)

本学部の教育でその能力を伸ばせるような学生が入学できるように、入試形態別のデータに基づいて入試や他の高大接続制度を改善していく。

**1. 6年後(2021年度)の目指す姿(目標)**

多様な学生を受け入れる一方で、各自がディプロマ・ポリシーを満たして卒業できるよう、入学時点で必要最低限の学力のある学生が入学できる高大接続制度にする。

**2. 上記の目標を設定した背景、課題及び現状分析について、記述してください。**

現在の高大接続制度は多様な学生を受け入れることができるが、入試形態別の入学後成績は大きなバラツキがある。とくに、一部の入試形態で入学した学生の成績は学部平均よりかなり低く、留年する者や学業意欲を失う者も少なくない。学部教育で前提とされている学力がないために、それを満たさない学生は入学後の努力だけでは継続して勉学に励むのは難しいという現状がある。

**3. 達成度評価**

<b>評価指標</b>	学年別に、入試形態別平均GPAの学部平均GPAからの差を指標とする。	<b>評価尺度</b>	A: 4学年とも安定的に-0.45以上 B: 2学年が安定的に-0.45以上 C: A・B以外 D:
-------------	------------------------------------	-------------	---

**4. 年度毎の目標値**

2015年度(現状)	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
C	C	C	C	B	B	A